

小柳正司 著

『デューイ実験学校と教師教育の展開』

— シカゴ大学時代の書簡の分析 —

米澤 正雄 (東洋大学)

2009年から2010年にかけて、「デューイ実験学校」に関する邦語研究書が相次いで公にされた。千賀愛『デューイ教育学と特別な教育的配慮のパラダイム—実験学校と子どもの多様な困難・ニーズへの教育実践—』風間書房、2009年；高浦勝義『デューイ実験学校カリキュラムの研究』黎明書房、2009年；小柳正司『デューイ実験学校と教師教育の展開—シカゴ大学時代の書簡の分析—』学術出版会、2010年；伊藤敦美『デューイ実験学校におけるカリキュラムと学校運営』考古堂、2010年、の四冊である。これらのうち、本稿で取りあげる小柳氏の研究にはふたつの特徴がある。ひとつは、千賀・高浦・伊藤氏らの研究が主に「デューイ実験学校」の教師たちによる実践記録〔「デューイ実験学校」報告書 (The Laboratory Schools Work Reports) や雑誌 *The Elementary School Record* (1900年2月～同年12月) に収録された、同校教師による *A Series of Nine Monographs*] を考察対象とするのに対して、小柳氏の研究は、「シカゴ時代のデューイの書簡」(Larry A. Hickman ed., *John Dewey Correspondence*, CD-ROM版：第1巻、1999年、第2巻、2001年) および「デューイ文書」(南イリノイ大学) を中心に、「デューイ実験学校」の組織・運営に関わるキー・パーソンの諸文書〔ハーバー・シカゴ大学学長、ブレイン夫人(「新教育の父」パーカーの後援者)、ジャックマン(シカゴ学院およびシカゴ大学教育学部におけるパーカー派の中心人物)、などの諸文書] を主要な考察対象とすることである。もうひとつは、「シカゴ大学時代」のデューイが自らの実験学校を、「シカゴ大学という研究大学をバックボーンに据えた教育専門職養成をねらいとした事業」として、いかに構想・開設し、組織・運営して、デューイ夫人アリスとともにシカゴ大学を辞任することによりその幕を降ろすに至るか、その全過程を詳細に跡づけていることである。以下、本書に示された見解を概括し論評を加えてみよう。

本書の章立ては以下の通りである(紙幅の関係で各章の表記のみ示す)。

まえがき

第1章 シカゴ大学着任 — 1894年2月～1894年12月 —

第2章 実験学校の開始と最初の6カ月 — 1895年6月～1896年6月 —

第3章 実験学校の開始から『学校と社会』の出版まで — 1896年～1900年 —

第4章 シカゴ学院の編入からデューイの教育学部長就任まで — 1901年～1902年 —

第5章 シカゴ大学教育学部の組織改革 — 1902年～1903年 —

第6章 デューイとシカゴ大学教育学部教員団との対立 — 1903年～1904年 —

第7章 ブレイン・ホールの完成と新教育学部の出発 — 1903年10月～1904年1月 —

第8章 デューイのシカゴ大学辞職の経緯
1903年～1904年 —

あとがき／索引

デューイは1894年7月にシカゴ大学哲学科（心理学・教育学を含む複合学科）主任教授として着任し、同年12月から翌1895年6月まで休暇を取り（家族と欧州旅行）、1895年10月から教育学部（学科主任デューイ）の授業を開始し、1896年1月には「実験学校」を開設する。「デューイ実験学校」は、この、シカゴ大学着任当初の1894年後半に、着想される。小柳氏は、「実験学校の着想」の「根」として、マクレランとの共著『数の心理学と算数教授法』（1895年）についての1894年8月18、19日の妻アリス宛手紙および同年12月4日付ハリス宛手紙に論及する（「私[デューイ]は最初にヘーゲルの量の論理学を心理学に翻訳することから始めて、それから教育学に翻訳したのです」、32頁）。小柳氏はまた、「実験学校の原イメージ」として、「一つのあるべき学校の姿」についての1894年11月1日付妻アリス宛手紙を取りあげる（「その学校では、実際のな……構成的活動が中心に置かれ、……学校は一つの抽象化され統制された社会生活体であり、まさに実験的な社会生活体と言える。もし哲学が実験科学になるとしたら、学校の建設こそ出発点である」、34頁）。

「実験学校」は初年度（1896年1～6月の半年間）、6～9歳児16名の生徒と正規教員クララ・ミッチェル（体育、手工を除く全科目担当）により開始される。「実験学校」二年度目（1897年7月開始）から

全科担当制は科目担当制に変更される。「実験学校」では、教師が、既に「カレッジで高度な専門教育を受け」、「自ら身につけている高度な専門科学の内容」にもとづいて「初等段階の子ども向けに教材開発」および「新しい教授法の開発」をおこなうことがめざされる。そのために、研究大学の教育学部に属する「実験学校」での教師教育は、「デューイの教育学部構想」によれば、「初学者を対象とする[徒弟主義的な]師範学校の教員養成」とは異なり、「既に師範学校を卒業している現職教員を対象に、教育理論の科学的研究と高度な教育専門職養成をおこなうこと」が求められるからである。デューイはこの二年度目にキャサリン・キャンプ（理科担当）を採用し、「実験学校の組織体制」を整える。翌三年度目（1898-99年）には「芸術」担当のリリアン・カッシュマン、「歴史」担当のローラ・ラニヤン等を採用し、教育実践に力点を置けるとともに、その成果を、1899年2月の「実験学校父母会」に報告し、同年4月の「実験学校の父母や支援者」を前にした講演、において提示する。ブレイン夫人の費用負担（510ドル）により、これらの講演は『学校と社会』と題し1899年11月シカゴ大学出版より発行される。そして翌1900年、*The Elementary School Record* 誌に「実験学校」教師による「教育課程」研究の成果（9分冊）が発表される。これらの研究成果の公表により、デューイは「初等教育段階の教育実験は終了したと考え」、「これ以降は中等教育段階の実験に関心を移した」（144頁）。

しかし、このような「デューイ実験学校」の発展とは裏腹に、シカゴ大学学長ハーバーは一貫して「大学自体の財政難と、理事会が実験学校を認知しないことを理由に、実験学校への大学予算の支出を認めなかった」（96頁）。そのためにデューイは、「実験学校」運営に必要な経費を、同校児童生徒の授業料のほか、有志の寄付に依存するよりなかった。この、「デューイ実験学校」の財政的基盤の貧弱さが露呈するのは、ブレイン夫人の財政的援助（100万ドル）によってパーカーとその配下の教員（旧クック郡師範学校教員）のために創設された私立の教員養成校、シカゴ学院とその附属実習校が、1901年4月にシカゴ大学に教育学部（学部長はパーカー）および附属小学校として編入され、さらに翌1902年3月パーカーの死去に伴う後任として同年5月デュー

イが教育学部長に就任した折である。デューイの教育学部長就任に伴い組織再編がおこなわれる。シカゴ大学哲学科および教育学科(学科主任はともにデューイ)のうち、後者の教育学科(教員はデューイ、1900年にエラ・フラッグ・ヤング、など計4名)が廃止され、旧教育学科教員4名は教育学部・教員養成部に配置換えされ、旧教育学科所属の「実験学校」は、教育学部附属小学校に吸収・合併されることになる。しかしその際、統合後の新附属小学校の校長にデューイ夫人アリスを据えようとする画策や一部教員の解雇案など、デューイの「恣意的な学部運営」が災いして「デューイとシカゴ大学教育学部教員団との対立」が深まり、1903年5月5日アリスを暫定的に同附属小学校校長職とすることで一旦は妥協が図られたものの、最終的にデューイ夫妻のシカゴ大学辞任(1904年4月)により、「デューイ実験学校」は終焉を迎える。

以下、本書の問題点を箇条書きする。

1. テーマ(「デューイ実験学校と教師教育の展開」)に対して、アプローチ(「シカゴ大学時代の書簡の分析」)は適切か。このテーマの解明には、デューイ自身の論著の分析・検討が主になるべきであり、「シカゴ大学時代の書簡」はそのための手がかりにすぎないのではないか(例えば、上述の「実験学校」の「根」と「実験学校の原イメージ」とでは、デューイ自身の論著を分析する視点も参照資料も相当異なる)。書簡に示されたデューイの本音や実際の言動に数多くの興味深い論点が示されているだけに、この問いを禁じ得ない。
2. 「デューイ実験学校」には(教育学)理論の実証、という側面がある。「デューイ実験学校」の教育実践は彼の教育理論にもとづいておこなわれる。「デューイ実験学校」における教師教育は、大学院学生への『教育哲学講義：1899年』を前提とした「観察・参加・教壇実習」をおこなう(「理論負荷性」のある「観察」から始まる)点において、パーカーの徒弟主義的な師範学校教員養成と異なるはずである。なぜこの講義録を検討しないのか。
3. 「デューイ実験学校」には理論の論証、という側面もある。デューイ哲学・思想にとって、「実験学校」での教育実践を通して「検証」しようとした「仮説」とは何かという問題である。この問

題についての見解提示を小柳氏に要望したい[尚、この問題についての私見は、日本デューイ学会紀要第38号(1997年)の拙論および新井保幸/高橋勝編『教育哲学の再構築』第10章、学文社(2006年)に示している]。

アメリカ合衆国にシカゴ大学時代のデューイ書簡を求めて検索し続けた小柳氏の多大の労苦により、今後の「デューイ実験学校」研究の基礎が据えられた。心より敬意を表する。

(学術出版会、2010年3月、408頁、本体価格6030円)